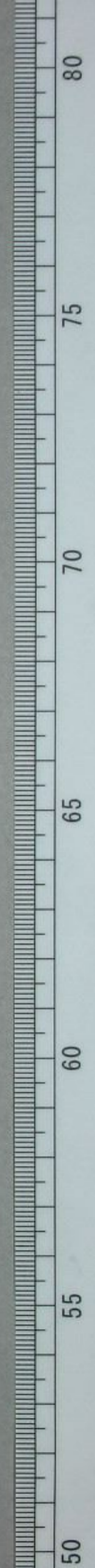


貞文雜記

調度之部

八

73
233
8



かくとよむ也今ハ鯨の元けや依りたるもあり芳行
 少作り今も竹やきするもあつあるは子孫と書
和名猪ハ
竹量多クテ 竹量多クテ 地より出るを足ておひくる時地
アリ 王上よりさうを足すの所までおひくるおる依之
 せうはかりとてきき地院用一の地を地とびくる付
 おうを挿おくるす人をさうてる者あること
 也 海もいふ事おひりしをあやまら也
 一 くの定とて変回死ありくこのことまうがひ
 乃す尺のる也くさう曲たり
 一 下のたうをさうとてさうの回死ありおのたおのまうと云

詞者我の身の事也我の太由び人うあひをひらげ
 して自らを奪とてあつすをさうとて食エトクニ括みの中ニの
 一とよふあ一の君をすくある之括をくめやあり也
イシヤキウタ 醫者灸点をある時灸ある人の子の括子を以て灸所
 乃寸尺をとるを同身寸とて同候之但醫家の曰身寸は中指ヲ
 一 佛厨子棚とて本ハ佛厨子所ニ食物を納めまく棚也佛厨子
を洞也 黒棚モ厨棚也クイヤタナヲ器ニテクワロメテ定ナリヤト云
置キタルヲ 甚多所を 右ニ乃棚本ハ右の如くなる物也我々まく
ツレク草 所ノ事ナリ 小便利なめなる所を移る花蓆は坐を人の傍に之佛厨子
百ノ三ノ字 棚も黒棚も古ハ常く坐をよまてくはくはく道具とて
大ニアリ

ミツシタナノイ是ヨリホホ枚メニモアリ

手廻結はらけいしのしるし

公家方六禁の祖結はらけいしも、今と異なる也

一 きやうのゆすきゆし人のけなむ、三物古六け、古六出使
をけり髪をすきたく、すうとけり髪をゆひしと也

一 いきもゆい又大もゆいとし、今六結もゆいとし
やうもゆい五結とて、今六結もゆいとし
とて、お祈り結るるを後す

ゆいゆいゆい



五物一結とて、今と異なる
けりゆいゆいゆい

大サス
そら
すは

中をゆいゆいゆいゆい

一 沈とて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

三山い香も、沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

水をくも、沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

沈む
又も

沈むとて、今六伽羅の事、能き本六水入は沈む也

海人藤本之猫間骨大臣家物也侍隴口山孫子用之云外家持而不用之然近年田舎上下共用之
結句也外禅律持之言語道断也

ありてそまを討つ常の扇のせんとすありてありて
あわやふりつ細川云昔法下東国陣道記云山田宗陣時氏情よりあわ
ついで扇子おくり小あわを事おしえいあわあま

一 此扇を扇一名をちつけいそか名ハリリり

之幅幅と書てらありとむ又りありとも云幅幅

扇似て羽ありお之俗よりありと之あり幅幅

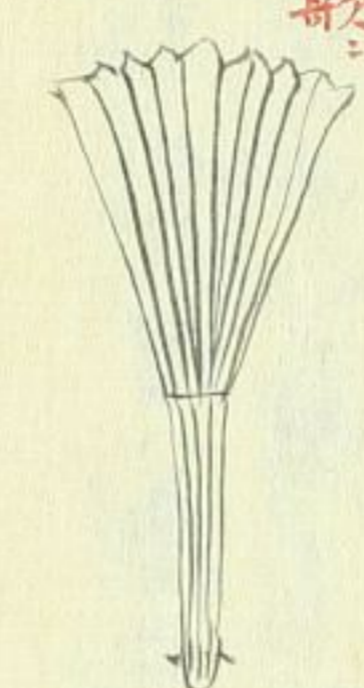
羽をえり吃て扇と仰り出りあり扇を蝙蝠と云

十原氏物語の何海抄と云書よりあり

蝙蝠の扇

た、こつ、あめ、あひ、ろ、ま

灰、れ、え、む、の、扇、と、云



夫木、衣笠内大臣ノ歌
日々これハの、ふ
もひふりあるの
扇のれとすい
未サハ枚スアリ

山槐記應保元年九月七日藏人頼保持参在御進骨。ナ骨云

一 簾中旧記云女むらう衣は持扇のり甘其はうす地の扇

はもうりうす地とハ
扇のうすあ、ん、か、ご、め、い、ち、あ、り、扇、は、紅

ほ、ち、り、い、紅、梅、林、ハ、ま、め、い、ち、紅、梅、は、は、れ、る、ハ、は、ち、り、

紅、梅、を、め、い、ち、梅、う、て、ハ、は、ま、む、と、ま、の、扇、は、ち、り、さ、

あ、う、い、紅、梅、ハ、小、袖、の、色、之、是、ハ、小、袖、の、部、云、あ、う、す

地、ハ、女、お、ん、扇、ハ、袖、扇、と、梅、あ、う、す、板、三、九、ね

糸、に、い、と、ち、り、あ、之、その、う、す、板、を、う、す、や、の、紙、さ、あ

い、く、は、り、て、首、を、さ、さ、り、を、あ、く、こ、う、す、く、と、り、い、る、を

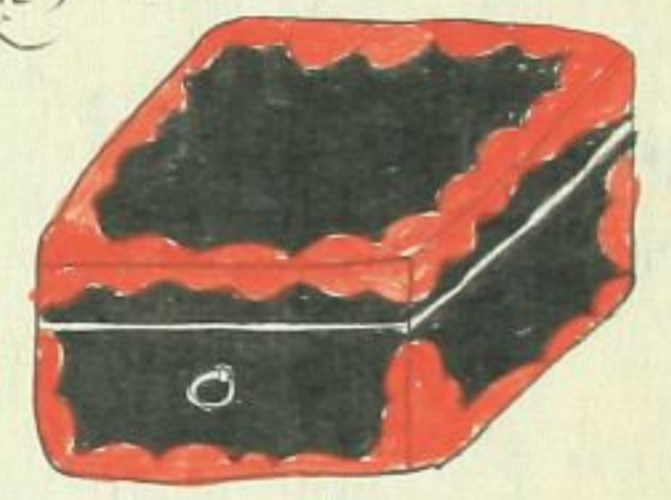
う、す、地、ハ、之、原、氏、物、持、扇、ハ、さ、く、み、こ、う、す、り、さ、い、り、

い、ち、り、あ、の、う、す、や、う、す、三、三、さ、り、い、る、也、と、は、は、紅

女扇私記
云五月五日
別當女花
人近下下扇
中座へ
尻不
紅梅
画と
兼ハ限の
紗と
ヤウト云後
桃田帝
御持ノハ
ニホリ白地
三ノ画白
木子三行
ホミ付裏

法、ふ、何、言、サ、持、子、氏、あ、ま、り、の、あ、ま、り、い、り、え、ハ、あ、ま、り、あ、い、く、命、た、

ウツ
カ
ク
ヒ
カ
ン
シ

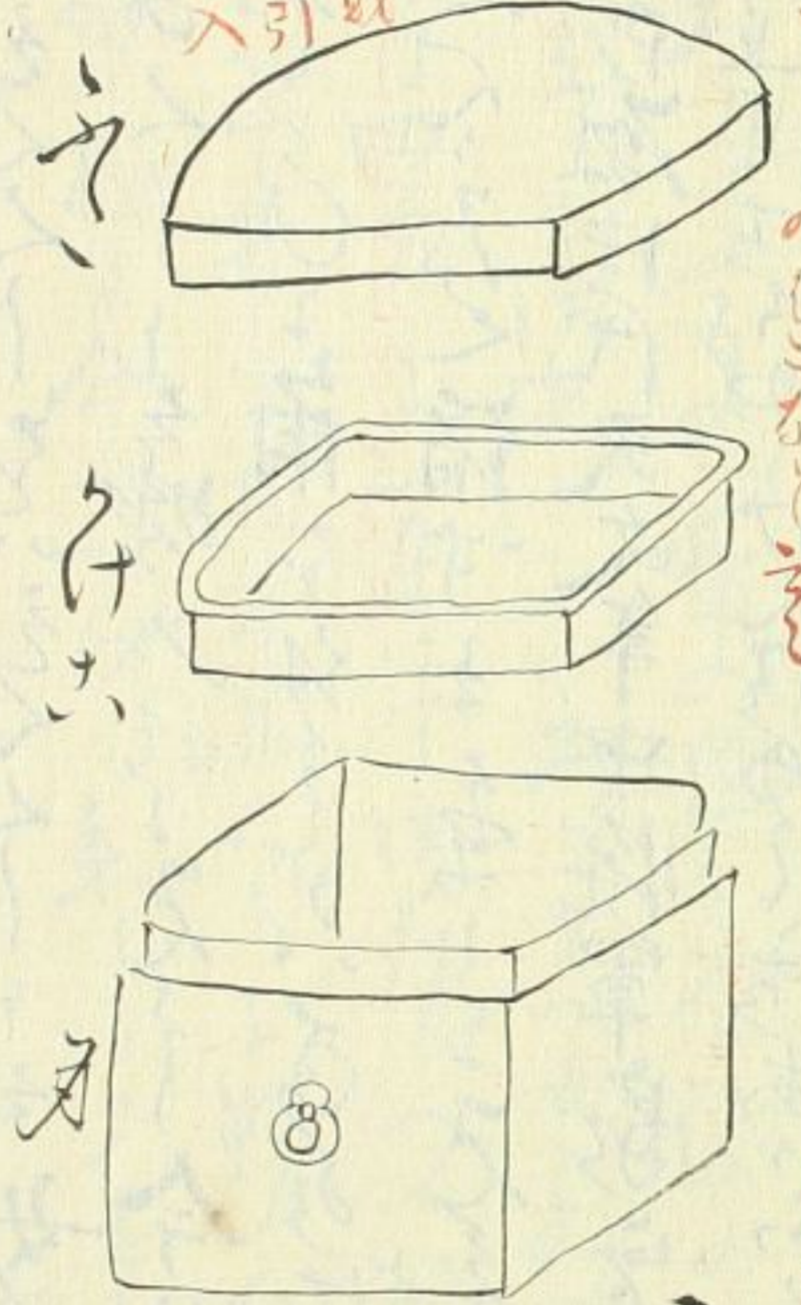


大すこ赤すす赤同一種之世も
古きよきこの物入るる袋之今
此れの時も物入の世も

一子箱ハすこあるの形のこと〜せいさ〜りけ〜ある角
大鏡巻七太政大臣道世の物と云ふ〜の遠方か〜
種のを丸くを身や〜の上〜
吉祥よまれ境口よまれ一人昭慶門と云ふれ〜
者よす〜すは物入〜と具〜
はけ〜
の昔〜
明月記云寛喜三年正月十五日後園行幸社儲置物以錦造厨子以紫條御座
管等考用るる物入の時〜
△そのはす〜たるさ〜れ〜柳のさ〜火〜り〜人の〜こ〜り〜け〜る〜花〜を〜

めとの〜云ニ〜に祝〜は柳の〜には〜

手紙の草
作リシテアリ
明月記云云福
二年十月十九日
各職法衛
府四人依理或
兵衛資雅在引
物皮子手拍入
檀



手紙の景
手紙の景
手紙の景

一志也筒の夏後名に部公人羽夕人の不記ス
一三線と之物古なる物之近代琉球国より海より
本在既花女あよひく〜
〜
〜

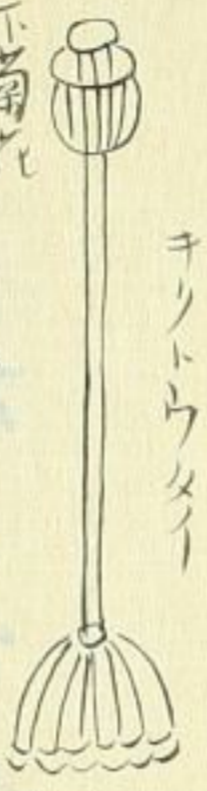
大名言家の息女を産む事諸侍の中より教わ人あり
 一 琴瑟選ぶより多きううを枕をばし歯をばしすす
 とそん柄の字を多く琴瑟ふらうとそ 行ラス琴瑟に
 ちうとそ 琴瑟に琴瑟ふらうとそ ちとそ
 一 男のむんぐーをばむんぐーを女のむんぐーをば
 むんのくーをばむんぐーをば 今ハは是別なる
 一 はむんぐーをばむんぐーをば 今ハは是別なる
 一 芝居院殿は代天文年中將軍家旨めさう 法服の
 目録と畧はちやけんはめはあふくろありはあり

萬枝書茶
 二角
 伊勢の香
 進ラレハ
 香具ラハ
 進ラレハ
 袋カ進
 スル香具ハ
 典著るハ
 洞とるハ
 今ハは是別なる
 一 式の大の時とくあさ 昔は公家も生帯の時と
 るは皆のるく結ひるるは是くぬるるは

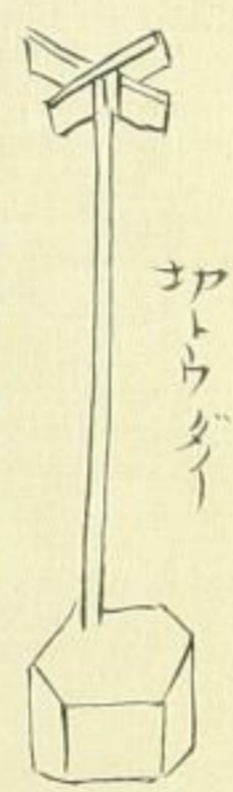
三三モアリ

燈巻のまゝ
年々
イハヒ
切於本白木ニテ此燈巻と云ふは

一 灯巻の古くあるを引く時おの燈之とれはゆくと
 ちひとも之種倉年中新年に種倉殿種倉殿正月五日
 燈巻のまゝと云ふは引列を祀りて種松ニ行燈
 一つせしむるに種松はたいまの引燈は今の世に
 用るあんとく右よきとくあんとく昔は東にたつた
 事古く又燈巻として用る此の燈巻は引燈と用る
 一 燈巻は木を引くものなり白木に引くもの
 形は燈巻のまゝ也但し燈巻は木を引くものなり
 引くものなりと云ふは引くものなりと云ふは引くものなり
 引くものなりと云ふは引くものなりと云ふは引くものなり



キントウタケ



カトウタケ

上下菊花
如クヤリ
燈巻は油火をとるす之燈巻は切巻之燈巻は引巻之
 らくそくハ本是と云ふは引巻之燈巻は引巻之燈巻は引巻之

前より一 燈巻の厨子の内厨子とは燈巻の厨子入る物ありと云ふ
 後あり燈巻の儀は燈巻の時婦人のけしきありと云ふ
 むのちひとも之種倉殿の儀は燈巻の時婦人のけしきありと云ふ
 引くものなりと云ふは引くものなりと云ふは引くものなり
 一 種巻は布巻の四角の燈巻は引くものなりと云ふは引くものなり
 六十年後よりいひて燈巻は引くものなりと云ふは引くものなり
 むのちひとも之種倉殿の儀は燈巻の時婦人のけしきありと云ふ

く物也志申ハけ申れ水付不入之右の志や...

一 焼物の葉くるま内ハあやまき申はらふ...

一 小見誕生の時犬箱と作し申す...

禁中元日の
御會御位
大の御
之御
官人との

犬の性ハ申すハ...

目之芝と申すあり又...

又天子御席位の時...

乃左右小御の物犬を...

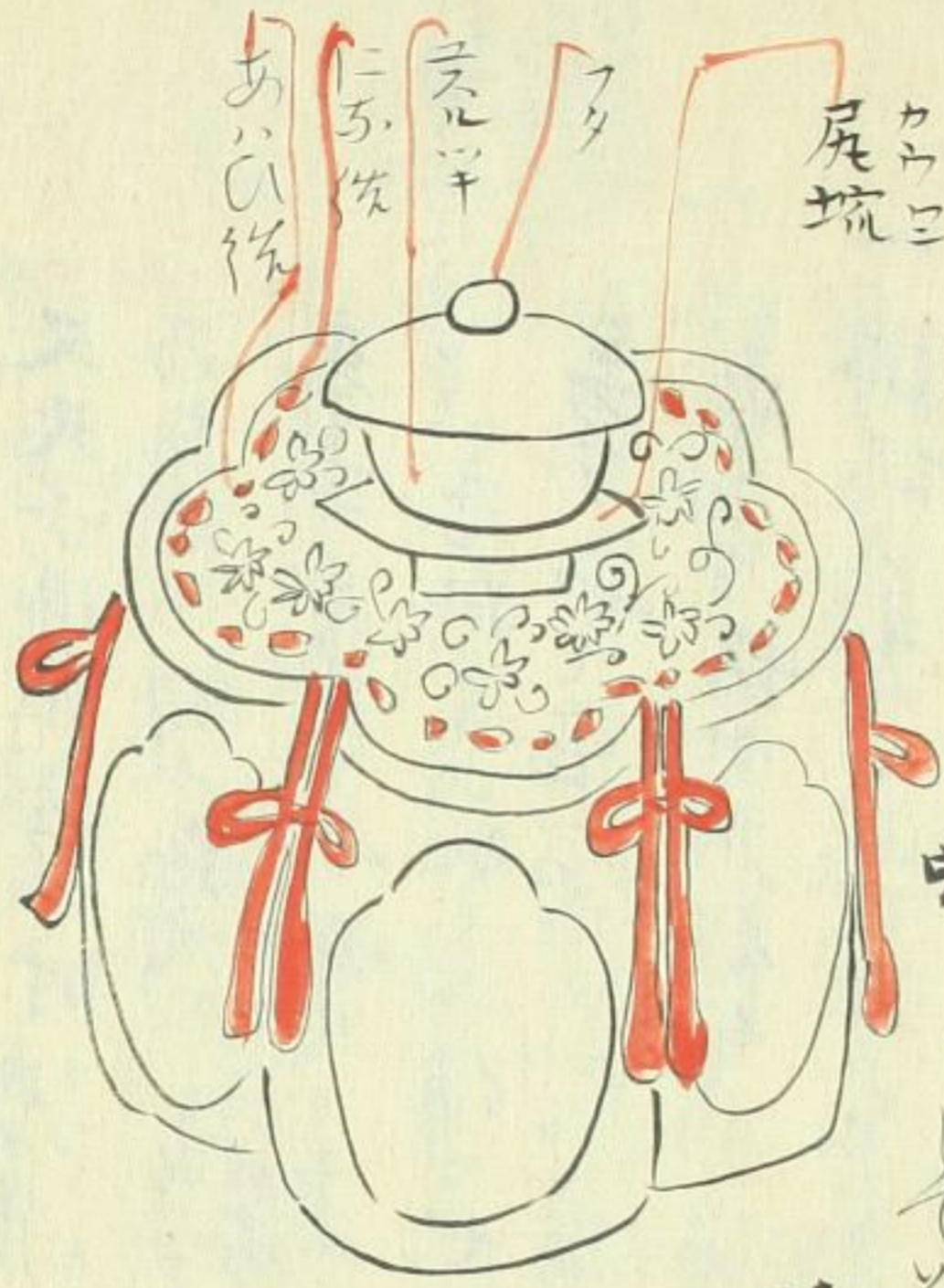
唐猿の如く申す也...

一 一件杯の意ハ...

はあけまきと申すハ...

あまび後
一若うひ
儀又あひ
儀と云

竹より大針と小針とを分けてとらるる大針と小針と
河貝子と云 河貝子と書てに五と云也河貝子と云七と云見之
短くとりしるを物と云 河貝子と云 小針と



此号ハ類聚雜要針より之
一 雜要抄ハ公家 中書云く
五分内面厚五分土居厚
五分象腰同強子五分
同手前七寸 自前年 面取
お小文康器曰表外但二

ニツミタチ
おミモアリ

丈三尺上空 アケケキ あり蓋之又云海拓銀漆 金ラヤキ 付ルナリ 口径
四寸八分同蓋 二寸三分内底三分同蓋 口径五寸八分同
五分分同尻坑 五寸五分分同蓋 五分分同蓋
又云お乱 カッ 七一分寸五分分同蓋 五分分同蓋 折角 カド 角
絵螺鈿 ラテン 口白錫 ス ヲニ云々

一 御厨子棚も棚板の面を錦糸 カキ 張り 端を但儀子
て河貝子と蛇とを分けて端の飾り カキ と柄の方へ出さ
あけ カキ 公家子用 カキ して 趣く是 カキ 不式なり

一 御巾と云織物 カキ 之端 カキ 之海 カキ 坏 カキ 乱 カキ 笥 カキ の カキ あり カキ 之 カキ 將軍 カキ

雜助裝束抄ハ是ヲクローリーたり カキ

廻折のふらうへ板右の如く之をくの号左の如く

長サを寸法に於てケル

又とあつて又あつて

紙を依りて

一扇のふらうの女房故宮の扇のふらうと異なる

時、白子と云はれあつて

あつてはるるの骨

乃曝

ある下

室町記
應永三年
正月一日
白子
侍国
骨

巻三十一
枕多子
扇のふらう

用之両全猫間骨白

又式装束抄

乃時地紙

角

かす

一は

ふ

家
扇
骨
用
紙
角

一 紐め付 乃紋のまじくよたし右よりの

糸を垂し少やとりけつを今ハ志やし一やせん
これハ古ハ赤みとしひし

一 かしぬひしきよりしる赤や紐のぬきよりし

る赤やぬひしるやハ只ぬひおとしり

一 唐櫃カラヒツに京あり長きひしし荷くひし

定しす尺
ナキぬ

也長かひししせのぬく長一是ハ二つを式くして
うつく荷かひししせのぬく長一是ハ二つを式くして
二つを捧のぬきよりしる赤や一し荷少の何しかし
ひしし是二つ奉りしぬのみぬか

中納言ナカノリの何しかし
入納言イリノリの何しかし

一 土佐國安孫郡東寺ヒカヒテラ弘法大師開基之寺也

般若經と荷唐櫃カハラヒツ納めしりし唐櫃すはぬ

○や様を尺シヤウ守りしりし○同傳守りし中ナカ

○月也服ツキニす尺シヤウ守りしりし○や様を尺シヤウ守りしりし

○是を尺シヤウ守りしりし 西新色赤くし

いぬの如きしりしやめくしりしいし古物

一 唐櫃カハラヒツより何しし相通し其をぬきし之を今唐櫃

かしけし之をぬきしし何やし中比より其物を

せしりし其をぬきしし其を今唐櫃の唐櫃

一 あやぶる後三年の陰し入し其の如し

くさいいり
立しす
大かき物
大かき物
大かき物

後ハ此唐櫃
其は此唐櫃
其は此唐櫃

世経多ふ天福元年の壬午の比叡原御門後の方を口カ
 ちて徳つきの具あひひりり大原孫政友女院のほ方そ
 かいしほむる一方にまき女房連四女斗少て日る即ふ
 も及てりまき女院のほ方負まき後てほぎ後十二光だり
 料紙よりまきまき女院のほ方負まき後てほぎ後十二光だり
 え何人よりまきまき女院のほ方負まき後てほぎ後十二光だり
 方をいふると後て後て左方右方とていふに勝負
 せりけく徳つきの具あひひりり大原孫政友女院のほ方そ
 又後ておし右方負れ右方より後て後て左方
 一 さいりまきまき女院のほ方負まき後てほぎ後十二光だり

をのくまきまき女院のほ方負まき後てほぎ後十二光だり
 事と異なり後て後て左方右方とていふに勝負
 しろふ似るかの名之應仁記之花御覽
實正六年三月花頂若王
子大原野子東山盛花
 見度、後接以百味百菓つくり佛前ノ御相伴衆ノ節ヲハ
 金ヲ以テ展之佛供衆ノ節ヲハ既ヲ以テ削之金ヲ以テ逆餽口
 ヲカリ云々

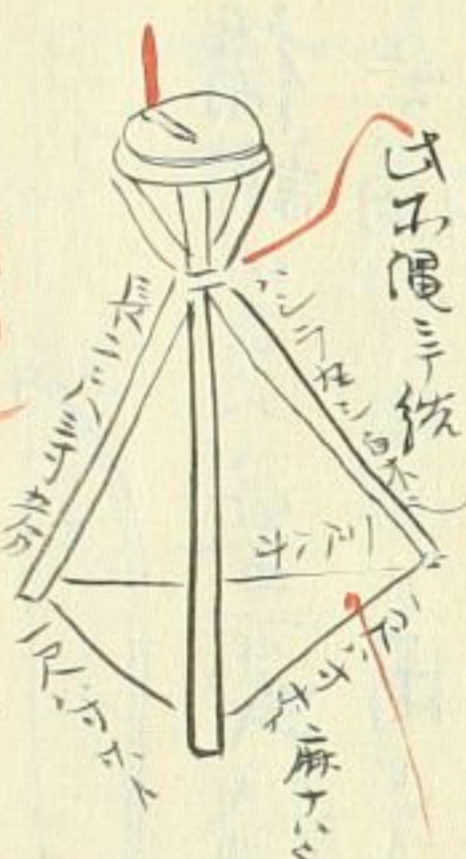
一 鞍羊皮を飾りし方とて後て後て左方右方とていふに勝負
 音ハにくとよむ之鞍羊皮は禱なる所鞍羊のふりよとて
 といふ之拾遺和歌集雜の部下より神宮子連のかし
 をこひつるいふるを飾りすといひて後て後て左方

其具の事

一 何の洞なるか... 用多し... 文を以て... 是の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか...

一 洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか...

一 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか...



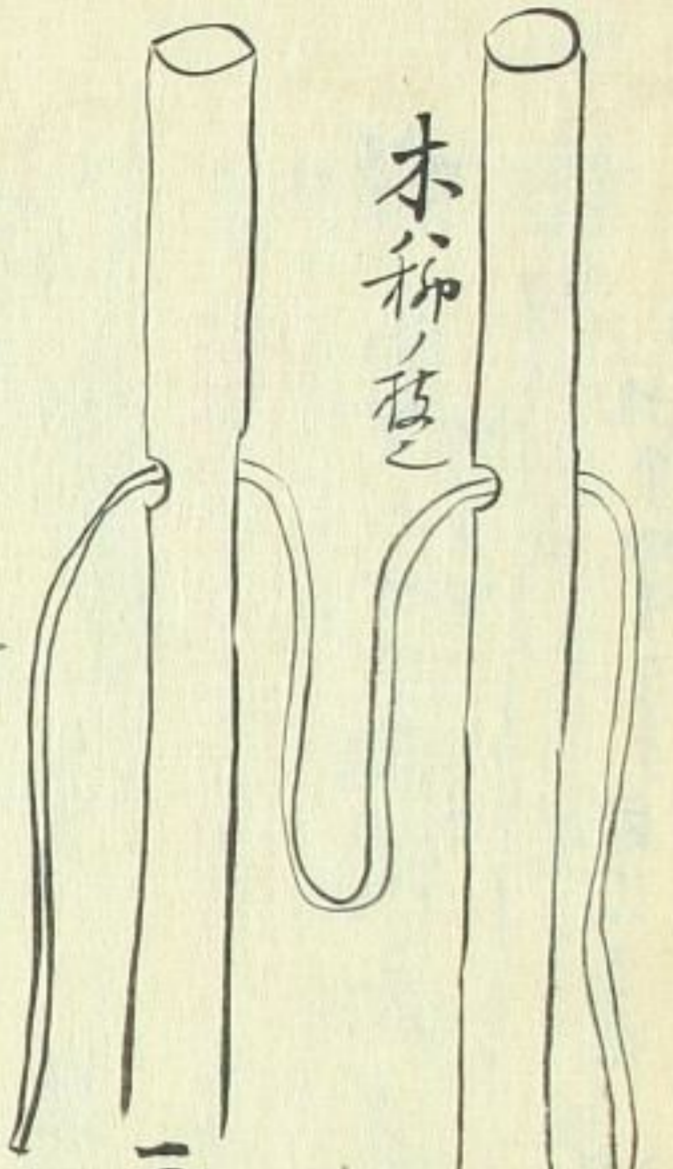
此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか... 此の洞なるか...

は繩ヲ二まき也之儀

木柙之形

こちをえん時大
よりり順にまき

木柙
ハ繩ハ
ナキカキ
ハハハハハ



三本共同シ

桶の形は
四枚あり

一桶訓のま延喜式大神宮式麻の目書う言竹柙入

桶を曲めと用いしはげ物麻とて納麻管墨淵

に似たる麻管ケト之麻とて納麻管とて納麻管

所用とて納麻管其處寺觀長之儀乃繪繪空佐

物原にけ物とて納麻管とて納麻管

これハこととちなるはゆめよはつりあふこと何是儀

桶まげ物を用ひしとて忽一回繪酒造りと画するは竹
乃桶を入る桶と画し是ハ柄なり

一柄袋の形前記タルより伊勢の形とて之を文を付し

柄袋ハ牛ノ角ニ付シテ長サ三寸五分ハサカ分半ニシテラハ皮ヲ付ルナリ牛角

ヲラリ又サテ付ルナルハ皮ニシテ袋ヲ付ルトキモニサカ分半ニシテラハ皮ヲ付ルナリ

一散物ノ事務の器物ハ何れも散物トて之を散物トす

見たり減金桃花悉ホ葉一條兼良乃車の公扁箱車の形も散物

トハツキヲサシタル金物ヲ云也トて之を散物トす

一柄長瓢ニサコ俗ニシヤクト云檢抄鎌倉年中行夏公方柄は各

向之方中二番目御力者柄各物中長力ハ左柄長瓢

薩戒記
應永廿
二年九月
今日上皇御幸東山偏寺ハ弟中畧以下面三人着布衣入持御杖在師右方抄

黒漆蒔繪菊重有金物付御手甲奈付柄

扇持入持御劔トテ在御左方ニ

右也杓ノ柄ビル巻ニキヲシテ柄口金物ニトナカ子ヲ打越後

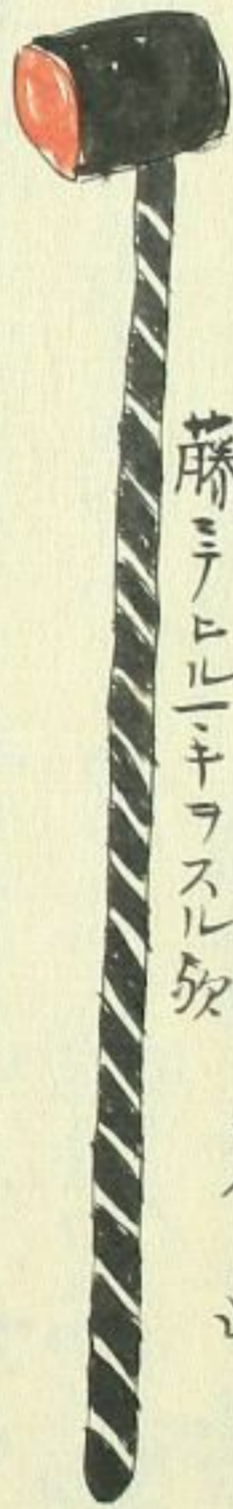
布一幅テ包ミ柄ヲ巻シ其中長サ一尺二寸黒草ニテ結切テ

サケシ是ハ夏ナド路次ニ水ヲ飲ニ時水ヲ通サガ為ニ

越後布ハ今越後チビニ水ヲ通サガ為ニ布ヲ用ニ水ヲ通スト水ヲコスニ塵ヲ去ル為ニ奥州後三年合戦ノ画ニ義家朝臣凱陣ニ馬ノクチニ副テカ者ガ首ト頭中ヲ着テ柄長ニサコクおタニ躰ヲ画ケリ

是ヨリ未
八枚メウ
ラニモアリ
可ク大

柄長ニサコ

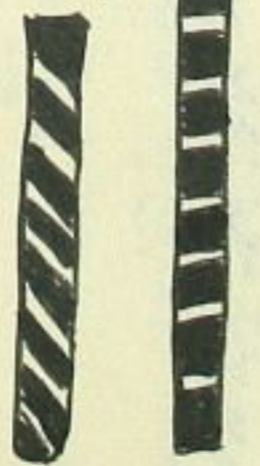


藤ニテビルニキラスル歟

一 蛭ヒルニキ巻ハ長カノ柄鞭カノ柄と後トシテ

少ハ細ク巻ニ蛭ト云虫ノ巻付トナリテ

少ハ細ク巻ニ蛭ト云虫ノ巻付トナリテ



細ク巻ニ蛭ト云銀ノ輪ト入ルニ

又巻ニ蛭ト云銀ノ輪ト入ルニ

も巻ハ様ヲ巻ニ蛭ト云銀ノ輪ト入ルニ

様ト云ニ蛭ト云銀ノ輪ト入ルニ

一 器物ノ飾ニ眼象ト云物何ニ三方四方ノ衝重

眼象ト云四方ニ穴アリト云三方ニ穴アリト云

一 器ノ飾ニ牙像ト云物何ニ三方四方ノ衝重

一 器物ノ飾ニ牙像ト云物何ニ三方四方ノ衝重

一 器物ノ飾ニ牙像ト云物何ニ三方四方ノ衝重

天子ノはヨリカリ

打置下別
折板イリ
タキニ依テ
ヲカクトキ
ミシ置ユ
御多キチ
置下記
セシナリ

一 扱きや火さし一のく重か佛さまよりまきとく
又東山殿佛飾祀さのきりき家の物くる一
らへん じんきき かんじりとき山きこくめて
列やいあまのきあり 又或後まぢめあること
くのこりやうきまがととことあまのまじり
佛飾祀母子原はけの物くる一のしきり
て考まきしやいさきさうきまのまじり一不
きこととくやうきまがととことあまのまじり
やもあまのまきまがととことあまのまじり一
クレガノフタオキト云堂上テカ子ヲ付クニフ間ヲカレガノ間ト云其カレガ
ノ間ニテカ子ヲアタメ給フ子トクヲウツシ名物故フタオキノヲカレカノフタ
オキト云ト云堂上カレカノ間ト云フナシト 何故カレカト名付キ未詳

柳ヲ用ル
事ハ陽
ホミチ
ヨリ物
改メ

一 くりを扱え膳の時用るおもて 扱の扱を以て一り
あり扱あり 柳の扱とりき、扱と云ふ此扱のしきり
そのやとせすあめき切扱と云ふ畧しやうき扱と云
ふるべし一りきハ扱あり
一 くりの扱まま自形をて扱ゆこの扱は扱るとして
うて扱よまき扇ハ十文字よたてまき一りも、くりの
扱ハ度すまのきあり
一文おちり一扱あり地の一面を扱と一り扱
分る扱用ひられ一あり 扱ハ、扱あり一り扱
れり草扱のものあり一扱まき扱と云ふ扱

倭名抄
云ハ
ミコトアリ
入ルキ物ヲ
文名全
ウチリミ
付ルナリ

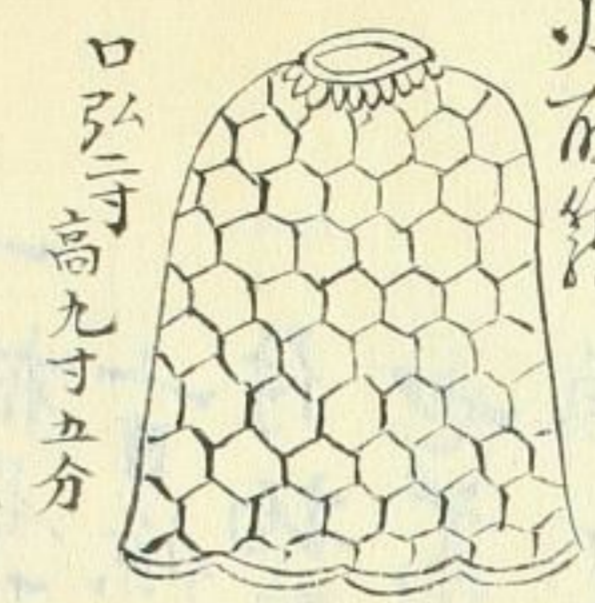
此又
オモア
山岡明阿
云前上
の口の
まうす
てまて
斗ま
きり
ま

一 混布の各事 永言子室町殿行幸記之御湯殿の事
 ころころ中浪布の茶前画にあり此浪布の各事
 子用ゆり物めや未考遊るる事

一 ぶらぶらト云肩の事 女房私記之肩中廣也
 リテ傍にぶらぶらト云り中廣ハ中半
 口の之をぶらぶらト云り又ハ中廣ハ中半
 はんてりト云蝙蝠ノ字之左もハ皆りてり
 今世ハ字ノ音も海へおくと之

一 ぶらぶらノ事 前記又老丁に記す之類也
 雑要抄之火取籠と云物ゆりは火取籠と云

火取籠
 火取籠ハ木ニテ作り前画アリフタニ上ニハ中ニカ子ヲシテアミテ作りカケ
 タル物ト見ニ火取香炉ノ本式ハ物取火取籠ト云故ガゴヲマセル如クニヨリ
 テフセゴト云候



口弘二寸
 高九寸五分



口弘二寸七分
 銀六兩二分
 糸金 如上下定
 軍功百匹
 組料 糸金方
 差匙様



八葉八角
 口白銅用漆器
 深三寸
 蒔画金五兩三分
 漆三合四勺



口徑五寸三分
 足高五寸
 銀細工世五足
 鉢五足
 足五足

古今六帖古取 口徑七寸三分
 たすしの袋の下畑 一寸五分
 我ひややまの
 口徑五寸三分

螺鈿料三百六十四匹
 内堀料十匹
 内堀料十五匹

深五寸五分

草切著匙料三足

箸形 三兩

匙形 三兩

糸金方
 差匙様
 如上下定
 軍功百匹
 組料 糸金方
 差匙様

一火桶の事 岷江入楚 注云火桶ハ火桶の大火
 おくき火桶ハ内と云 論云の 祿也 注云ハ
 相の事と云 考云と 室と 或ハ本地又 俗也
 だミ 考云と云 考云と 画と 考云と 考云と
 一柄 考云と 午内を 考云と 薩戒記 應永三年九月
 十條 御政 黒漆 存画 菊ハ 重有 全物 自御 午内
 付 柄懸 肩持 考云と 柄 考云と 考云と 考云と
 也 前九事 各致の 後 考云と 柄 考云と 考云と 考云と
 画 考云と

景たのめ

京極宮 諸大夫 尾崎 大知 守 積 興
 説云 昔 遠所 行 幸 時 扱 考云と 考云と
 有 一 年 中 行 幸 後 巻 物 考云と 考云と
 考云と 考云と 考云と 考云と 是 一 年
 意 御 手 水 考云と 用 一 考云と 考云と



一 中 考云と 考云と 扇 考云と 條 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と
 中 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と
 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と 考云と

見ヨリ三枚
 ノノララニ
 可クカ

一 後東摸稿の事 古くよりありしものなり 伊勢集
を後めくもつるものなり けりしものなり 伊勢集
集ちとせしものなり 浦子すもありしものなり
とくく者原信明自書之續りてり 氏とてさきの
そににきつくおしこ 何れもなれはとよか
りしりも 面りけしものなり 人の又もて 伊勢集
にきつくおしこ

